

## 『クライム・ソドム 3』 サンプル

## 目次

登場人物紹介

第一話

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話

第三話

第四話

最終話

## 登場人物

**半藤太一郎 (ばんどう たいちろう)**

26歳。剣道の世界大会日本代表。

恋人を誘拐され、誘拐犯たちに辱められる。

平常時 9.4センチ、勃起時 24.7センチのチンポ。

**築紫圭子 (つくし けいこ)**

今を時めく清純派女優にして、太一郎の恋人。

誘拐犯に攫われる。

**誘拐犯たち**

築紫圭子を誘拐し、彼女を盾に太一郎を徹底的に辱める犯人たち。

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

## 第一話

「今度の日曜日、両親に会ってくれる？」

電話の向こうの築紫圭子（つくし けいこ）の問いかけに、半藤太一郎はついにこの時が来たと思った。

築紫圭子は今を時めく清純派女優であり、まだ交際を公表してはいないが、太一郎の恋人でもある。

二十六歳となった今の太一郎は、恋をしていた。

遅い初恋であった。

奇跡のような初恋であった。

初恋を迎える前に男たちに凌辱されたDK時代、そして、剣道部を守るためとはいえ再び男たちに辱められた大学生時代。

平凡な男ならば、いや、非凡な男でも経験しそうにない不幸を二度も経験した太一郎は、汚れてしまった己を知られる恐怖から、恋愛など一生できないと思っていた。

だが、そんな太一郎の思い込みを打ち崩したのが、圭子の存在だ。

圭子と出会ったとき、太一郎はこれまでに経験したことのない衝動を覚えた。

圭子と知り合いたい。

言葉を交わしたい。

叶うならば手をつなぎ、心をつなぎ、身体をつなげたいと強く願った。

汚れている己への劣等感を忘れるほどの引力を、太一郎は圭子から感じた。

自慰も満足にできないほどに損なわれた己の男としての本能が再生されていくと実感した。

そして、恋の引力は圭子もまた太一郎に対して感じていた。

そうして知り合った二人は徐々に心の距離を近づけていった。

太一郎は、己のためだけではなく圭子に勝利を捧げるためにと稽古に熱が入った。

その結果、剣道大会で優勝を重ね、世界選手権の日本代表に選ばれるまでになった。

まさに恋の力は偉大であった。

二度も凌辱された太一郎に男の自信を復活させたのだから。

「ああ、必ず時間を空ける。

ご両親にもよろしく伝えてくれ」

「ええ、分かったわ。

それじゃあおやすみなさい」

「おやすみなさい」

太一郎は電話を切ると、部屋の中を歩きだした。  
歩いているうちに段々と歩く速度が速くなる。  
徐々に実感してきた。  
圭子が太一郎を両親に紹介する意味を実感してきた。  
太一郎はガッツポーズをした。  
これまでの人生の不幸全てと釣り合うほどの幸福を強く感じた。  
圭子との結婚に向けて弾みがついたのだ。  
圭子に恋をしている男として、嬉しくないはずがない。  
圭子のことを思うと、太一郎の胸は熱くなる。  
圭子と結婚をすれば、セックスもできるだろう。  
童貞であった太一郎を襲った卑劣な犯罪故に、嫌悪の対象であったセックスも、今の太一郎には圭子との愛の営みという肯定的な意味が加わっている。  
太一郎の股間でチンポが勃起し始め、スウェットの股間を大きく盛り上げる。  
そうだ、圭子とのセックスに向けて練習をしなければ。  
太一郎はスウェットをボクサーパンツごと脱ぎ捨て、勃起チンポを露わにした。  
太一郎の勃起チンポは竹刀のように凜としていた。  
真っ直ぐ伸びた陰茎の先には土筆の穂のようにぷっくりと膨れた亀頭が半分ほど皮を被っている。  
チン毛はもっさりとして濃く生い茂っており、男性ホルモンの活発さを伺わせる。  
見た目は男たちの憧れを集める立派な巨根であった。  
こんな見事なチンポの持ち主が、自慰も満足にできない欠陥品だったなどと誰が思うだろうか。  
けれど、太一郎は自慰も満足にできない男の欠陥品であった。  
DKの時に受けた凌辱が原因で、快楽に拒絶感を抱くようになり、男であるにもかかわらず、チンポを抜いてザーメンをぶっ放すという簡単なことでさえ、出来なくなっていたのだ。  
太一郎はベッドに腰掛けると、勃起チンポを抜き始めた。  
半剥けの包皮が太一郎の手の動きに合わせて伸び縮みする。  
チンポを抜くたび、太一郎の顔が苦悶に歪む。  
自慰をしているのに、快楽に溺れる男特有のエロティックな表情が現れないのだ。  
太一郎の脳内は苦悶の記憶で満ちていく。  
DK三年の時に銀行強盗に強要された人質たちに輪姦され、男であるにもかかわらず男に犯されて感じてしまった恥辱。  
見知らぬ男だけではなく、信頼できると思っていた近所の大学生にまで野獣のごとき欲望をぶつけられた絶望。  
剣道部を守るために、男たちに弄ばれ、仲間であるはずの剣道部員たちにも犯され、凌辱されたいなどと思ってしまった大学生の記憶。  
思い出すだけでも忌まわしい屈辱と絶望の記憶は、太一郎の快楽と分かちがたく結びついている。  
だから、チンポを抜いて快楽を得ようとするだけで、太一郎は屈辱の記憶を追想させられる。

あの時の恐怖、絶望、屈辱、そして快樂を感じた己への嫌悪が身体の奥底から湧き上がり、快樂を得ようとチンポを抜く太一郎を責め立てる。

「ひぎい……ああ……ぐああ……」

太一郎の口からは自慰をしているとは思えない苦しみに満ちた声が溢れ出る。

剣道で鍛え上げられた太一郎の益荒男ぶりを示す立派な筋肉が汗に濡れ、ぬらぬらと輝きだす。

太一郎の手の中では勃起チンポがギンギンになり、我慢汁を流し始める。

チンポだけを見るのならば、順調に気持ちよくなっているように見える。

だが、太一郎の顔は苦悶に歪んでいた。

まるで、今もなお凌辱されているかのような絶望に顔を歪ませている。

全身を苦悶に震わせる太一郎の様子は自慰というよりも苦行をしているかのような。

事実、太一郎にとって自慰は苦行であった。

男ならば、自慰とはもっとも簡単な快樂発散の手段だ。

多くの場合、チンポを抜いて気持ちよくザーメンをぶっ放す。

ただそれだけの行為が太一郎にとっては、凌辱された屈辱と絶望の記憶を呼び戻す引き金となっている。

チンポを抜くたびに凌辱の記憶を追体験しているのだ。

だから、大学生時代の太一郎はチンポを抜こうなどとは思わなかった。

チンポを抜くという行為があまりにも重く、辛く、汚らわしいものであったのだ。

「ぐうう……うあああ……けいこお……」

そんな太一郎が辛い思いをしながら苦行のようにチンポを抜き続けるのは、圭子との未来、すなわち、圭子とのセックスに向けた予行演習だ。

圭子との出会いによって、男としての自信を回復し通津ある太一郎にとって、圭子とのセックスは己が男として復活する山場である。

圭子とのセックスをするには、己の性欲をコントロールし、屈辱と絶望の記憶に耐えて射精できなければならない。

太一郎はその一心で必死になってチンポを抜いているのだ。

普通の男からかけ離れた太一郎の余りにも切実で、そして同時にどうしようもなく無様な自慰であった。

太一郎は顔を青くし、全身を絶望の追体験に震わせながらチンポを抜く。

快樂が高まるにつれて、太一郎の屈辱の記憶も鮮明さを増していく。

見知らぬ女性たちの前で全裸にさせられ、チンポのサイズを叫ぶことを強要されたときの、女性たちの軽蔑の眼差し。

媚薬を塗り込められた状態で禁欲を強要されたときの終わりのない悶絶地獄。

「もう無理」と懇願をしても絞られ続けた強制射精のおぞましさ。

セックスをさせてやると純潔アナルを割り開かれ、嘲笑われながら犯された絶望。

剣道部を守るために全裸にさせられ、全身の毛を剃られた心細さ。

オナニーを強要され、オナニーすらできないことを告白させられた悔しさ。

イラマチオをさせられ、アナルを犯され、剣道部員たちにまで輪姦され、凌辱されることに悦びを覚えてしまった恐ろしさ。

過去の屈辱の記憶が爪を伸ばし、太一郎の心の傷をこじ開けていく。

お前は汚れた存在だ。男ですらないオナホールだ。

薄汚れた記憶が太一郎を嘲笑い、自慰を苦行に染め上げていく。

「けいこお……けいこお……」

太一郎はそれでも必死にチンポを扱き続けた。

圭子と愛を交わしたい。

圭子と結ばれたい。

圭子とセックスをしたい。

その一念で、己の性欲を取り戻そうと必死にチンポを扱き続ける。

けれど、凌辱の記憶は鮮明さを増していく。

DK三年、女も知らぬ無垢な身体にねじ込まれたチンポによって感じ、トコロテンまでしてしまった己への汚らわしさが濃厚になっていく。

アナルセックスの快楽の記憶が太一郎の雄膣を疼かせていく。

圧倒的な力に拠って凌辱されたのなら、感じてしまっても仕方がないという諦観が太一郎の雄膣を揺さぶる。

雄膣に出し入れされるチンポの感覚。

前立腺を扱られる悦び。

雄膣を満たされ、支配される充足感。

知らず知らずのうちに太一郎の指は己のアナルへと伸びていた。

太一郎の頭の中は輪姦アナルセックスで満たされる。

「ふぐう……おがぁ……けいこお……」

それは淫らな光景であった。

太一郎は呻きながら、彼女の名を呼びながら、チンポとアナルを同時に愛撫しているのだ。女の名を呼びながらチンポを激しく扱くだけならば、雄の生態といえただろう。

けれど、太一郎は己のアナルも愛撫している。

三本の指を出し入れし、アナルセックスの記憶を反芻しながら喘いでいる。

果たして今、太一郎は雄の快楽を得ているのか、メスの快楽を得ているのか。

太一郎にとってどちらが真実なのか。

それは太一郎自身にも分からない。

今の太一郎は、圭子への思いを胸にアナルセックスの記憶を反芻しながら自慰をしているだけで、他のことを考える余裕などないのだから。

苦悶に満ちていた太一郎の顔にほんの僅か、快楽の色が現れる。

太一郎の勃起チンポが我慢汁でぬらぬらと淫らさを増している。

太一郎のアナルは三本の指を唾えこみ、ヒクヒクと蠢いている。

「あああ……うぐう……」

太一郎が切なげに呻いた。

ザーメンをぶっ放す悦びに震えているのか、アナルを蹂躪する指に物足りなくて震えているのか。

太一郎が背を仰け反らせると同時にザーメンをぶっ放した。

巨根に相応しいザーメンが大きく打ちあがり、太一郎の顔や胸に降り注ぐ。

太一郎はため息をつくと、アナルから指を引き抜いた。

先ほどまで雄膺を慰めていた指を見つめ、もう一度ため息をついた。

「……圭子とセックスをするまでに直さないとな」

太一郎はティッシュで顔や服についたザーメンを拭いながら首を振った。

これが今の太一郎のオナニーなのだ。

チンポを扱くことだけで射精しようと努力をするも、凌辱欲求に耐えきれずにアナルに指を入れてしまうオナニー。

普通の男ならば、アナルなど弄らないことは太一郎も重々承知している。

普通の男ならば、チンポを扱くことだけで射精できることは、凌辱される前は普通のDKであった太一郎はよく理解している。

己が普通の男ではないことを太一郎はオナニーの度に思い知らされている。

けれど、それでも、太一郎は普通の男のように圭子を好きになった。

圭子を愛したいと強く願っている。

この愛があるのならば、太一郎は凌辱された過去を乗り越えて普通の男として再生できると信じている。

アナルの快楽や抵抗を封じられた状況での凌辱願望などといった、男らしからぬ汚らわしい欲望を捨て去り、剣道選手に相応しい性生活を取り戻せると期待している。

圭子と結婚をし、セックスをし、幸せな家庭を作る。

それが今の太一郎の願いなのだ。

太一郎はシャワーを浴びるために立ち上がった。

股間では射精を終えて萎えた巨根がぶらぶらと揺れている。

萎えてもなお、堂々とした風格を備えた立派なチンポだ。

全体的に薄い体毛と対照的に濃いチン毛や精力に満ち満ちている金玉などと合わせても、男の願望を体現した巨根であると言えるだろう。

太一郎は雄としては歪な存在だ。

剣道選手として鍛え上げられた肉体も、立派な巨根も雄としての魅力を体現している。

男の憧れの到達点の一つとも言えるだろう。

だというのに、太一郎の内面は雄らしからぬ傷が深々と刻まれている。

男であるにもかかわらず、凌辱の被害に遭った。

それも一度ではなく、二度もだ。

その結果、太一郎はオナニーすら苦行じみたものとなり、凌辱の記憶を思い出しながらアナルを弄らなければ射精できない存在に成り下がってしまった。

こんな秘密を抱えたまま、剣道選手として振る舞い、圭子の彼氏として振る舞う太一郎は嘘で塗り固めた砂上の楼閣だ。

何か、太一郎の秘められた傷を暴かれるような事態に陥れば簡単に崩れてしまう仮初の男らしさだ。

太一郎はその事に気がついていない。

いや、あえて考えないようにしているのだ。

太一郎のこれまでの人生は不幸であった。

男であるにもかかわらず、二度も凌辱され、凌辱願望を刻み込まれてしまったのだから。

だからこそ、太一郎は今度こそ幸せになれると信じている。  
禍福は糾える縄の如し、という言葉に縋っている。  
けれど、太一郎に送る言葉はもう一つある。  
二度あることは三度ある。  
男によって凌辱の贄として見出され、弄ばれ、快楽を刻み込まれた太一郎がそうやすやすと凌辱の闇から抜け出せるはずなどないのだ。

## 奥付

『クライム・ソドム 3』より、第一話

初出：2021年10月30日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)